



定住外国人にとって「地域」とはなにか（LINK を読む）

樋口, 大祐

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 4:78-81

(Issue Date)

2012-08

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81004254>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81004254>



LINKを読む

定住外国人にとって「地域」とはなにか

樋口 大祐

筆者は大学時代、最初に「国史」（日本史）を専攻しながら、のち落伍して国文学（日本文学）に移籍した者である。落伍の原因は、当時自分が関心を持っていた保田與重郎や日本浪漫派に対するアプローチの方法が見出せなかったことと、日本史学の学問的前提とされていた戦後歴史学的な発想や研究史の文脈に対して余りにも無知であったことにある。しかし国文学に移籍して以降は、その研究室の雰囲気や古典文学（の価値）を自明視している（ように見えた）ことに違和を感じ始めた。保田與重郎は一九三〇年前後の旧制高校時代にはマルクス主義者であり、彼の浪漫主義は社会的な意識をアイロニカルに封じ込めたぎりぎりの臨界で成立したものである。しかし一九九〇年代初頭のバブル崩壊前後の国文学にそのような屈折した意識はなく、ドメスティックで自己肯定的な雰囲気の中で、制度によって保障された古典と戯れているだけのように見えた。それもまた錯覚だったかもしれない（安保世代

や団塊世代の研究者の屈折に気づいたのはもっと後である）。しかし長い眼で見れば、国文学という学問の中に、「自ら属する文化的共同体の外部については知らなくて良い——知りたくない」という無意識が存在することは否定できない（おそらくこれは日本だけの現象ではない）。反対に、過去・現在・未来の人類とその歴史社会に対して、どこまでも責任を持つて向き合おうとする姿勢を崩さない戦後歴史学のスタンスが、時に眩しく、懐かしく想起される機会が多いことも事実である。

今回、神戸大学人文学研究科地域連携センターの紀要『LINK』を読み、従来漠然と抱いてきた上述の印象を改めて強く感じた。と同時に、地域連携センターが目指すものの困難さとその困難の中で追求されている志の高さ・事柄の重さ、翻って日本文学のフィールドで自分がやるべきことに思いを致さざるを得なかった。例えば、（対談）吉田晶氏＋大山喬平氏「歴史学は地域とどう向き合うか」

(第三号)には、戦後民主主義と不可分のものとして推移して来た戦後歴史学の精神がはつきりと刻印されているように思われる。言うまでもなく戦後民主主義は戦前の政治文化への対決の意志と共に形成されてきたものである。実は戦後の国文学においても、戦後民主主義を強く意識した研究・実践が目指された時代もあった。永積安明を初めとする一九五〇年代の歴史社会学派は、戦争に帰結した過去の文化遺産を否定するのではなく、それらをより良い「民主的」な社会の基礎を成し得るものに作りかえて行こうとする志向を持っていた。しかしその精神は(少なくとも明示的には)現在の日本文学研究において充分に継承されているとは言えない。ペンヤミンを想起するまでもなく、「文化財」「文化遺産」はいつの時代も権力の莊嚴物としての面を否定しがたく抱え込んでいる(筆者が関わりのある『平家物語』でいえば、この物語は一二世紀末から一九世紀半ばまで数百年続いた武家政権(公武二重体制)の起源を

解き明かす神話として、また「武士」に支配階級であることの正統性とアイデンティティを付与する物語としての側面を持っており、それ故に結果として現在に至る日本人の歴史的想像力を方向づける役割を果たしてきている)。これらを民主的な古典遺産として「読みかえる」ということは、それらを成立当時の社会構成や緊張に満ちた諸関係の中に差し戻し、人々をその諸関係の中に身を置きなおす思考実験に誘うことを意味する。しかしこれは一般に国文学に関心を持つ人々が古典文化に求める起源論的発想(アイデンティティ・ポリティクス)とは鋭く対立する営みであることは否定できない。歴史社会学派の実践が国文学界に根を下ろし得なかったのは、最終的には、国民国家システムの中で人々が国文学に求める「期待の地平」に拮抗し、それを作り変えていくに足るヴィジョンを提出しきれなかったことが最大の原因ではないか、と思われる。この問題は恐らく「地域史」においても無縁ではないだろう。ある地域の文化

遺産とされるものは皆、多少とも身分制社会の構造やその再生産と関わっている。そのような状況で、当該地域のある景観や文化財を地域の「個性」として特定し、予算措置その他を通じてその「個性」を保存・保全しようとすることは、必然的に当該地域の諸関係に介入し、一定の価値づけを行なうことになる。ここで重要なのは、市澤哲氏「『よそ者』の効用」(第二号)が指摘しているように、研究者・教員は当該地域においてあくまでも「よそ者」であり、研究者の当該地域への介入行為は民主的な手続きに拠る地元住民多数の合意を経過しなければならぬシステムになっているという点とであろう。地域住民の中には、上述の起源論的発想も含め、相矛盾する複数の立場や思惑を持った人々がいるだろう。『LINK』には、センターに関わる人々がそのような地域住民や行政・自治体の複数の意志との度重なる折衝・交渉を通して、一つの目に見える結果を実現していく様が幾つも報告されている。もちろん

研究者・教員の当初の志向がそのまま実現されるとは限らないだろう。しかし上述の度重なる折衝や交渉行為自体が、市澤氏「LINK」によせて」（創刊号）のいわゆる社会関係資本という公共財を創出するものと捉えることができれば、地域連携の活動は現代社会におけるネットワーク形成の社会実践活動の範例の一つになり得ると思われる。

国文学者が自らのフィールドにおいて撤退して久しい活動を、地域連携センターが複数の地域住民をパートナーとして同時並行的に行なっていることを考えると、その意志・情熱と実行力に敬服せざるを得ない。と同時に、現在、神戸大学で永積安明の系譜に連なる教育研究のpositionを与えられている筆者としては、歴史社会学派の仕事や盛衰の軌跡を、未来の可能性に向けて捉えなおす作業を始めるべきだという声を聞く思いがする。

とはいえ、『LINK』の誌面から読み取れる限りで、地域連携センターにおける

「地域」という枠組みの内実について、全く疑問がないわけではない。村井良介氏（「地域史」と「地域の再生」をめぐる理論的課題」（第二号）が指摘する、「地域」「地域史」というカテゴリーが境界を持ち、内外を選別するシステムを内包していることと関わることであるが、筆者が一番気になるのは「定住外国人」や民族的（言語文化的マイノリティ）と「地域」の関係である。酒井直樹氏は沖縄出身の批評家仲里効氏の編集する雑誌『EDGE』一二号に寄せた一文「マイノリティの記憶 ひとつの系譜学の試み」の中で、あるユダヤ系の友人のマイノリティとしての記憶を「いざという時になつたら、ある例外的な緊急事態が起こつたら、この国の大多数の人々は、私を殺しに来るかもしれないが、しかし、この国の人々の中には、私を決して裏切らない人達もいるだろう」という言葉で定式化している。こうした人々にとっては、自分が何者であるかを知られず、匿名で生きられる都市的な生活空間もまた貴重な社会関

係資本である。逆に、皆が顔見知り同士で、親しげに挨拶を交わすような「地域」形成や、「住民が一人ひとり輝く」（岡田知弘「ポスト構造改革期における地域づくりと歴史の再把握」、第二号）「地域」発展モデルは、場合によってはむしろ「脅威」なのではないだろうか。

また、定住外国人が匿名性ではなく、自身の言語文化に基づくコミュニティ形成を志向する場合もある。この場合、その外国人コミュニティは「地域」に基づく社会関係資本の重要な構成要素になりうるが、それはかなり複雑な言語形態を含むことになる。定住外国人（二世、三世）の多くは、日本語と母語が入り混じるビジン・クレオール的な複数言語使用が常態である。彼等のライフストーリーを単一言語（日本語であれ、母語であれ）に翻訳してしまうと、彼等の人生の重要な構成要素である複数言語を渡り歩く経験の重要性が無視され、忘却されてしまうことになる。彼らを地域住民として公正に扱うためには、神戸や尼崎はもちろ

ん、たとえば姫路や篠山や小野においても、彼らの言語使用形態に即した繊細な対応が必要になるだろう。

しかし、そもそも外国人住民が隣接居住地域の日本人住民やその歴史にどれだけ積極的な関心を持っているか、疑問がないわけではない。インターネットが普及した現在、出身国の親戚や友人が彼らの心の拠り所であり続けている例も少なくない。岡田氏は「人間の生活領域としての地域」と「資本の活動領域としての地域」の背離を問題視され、前者に基づく「地域の再生」を提唱されている。しかし定住外国人の生活世界は自身の居住空間を中心に同心円上に広がっているのではなく、居住空間と出身地域を結ぶ「回廊」を軸として、国境を越えて広がっている場合が圧倒的に多い。グローバル化は移動によるアイデンティティの複数分散化を促進するのであり、その意味で「定住外国人にとって「地域」とは何か」という問いは、「人間の生活領域としての地域」という概念自体の組み替えを迫る

論点を含んでいるのではないだろうか。戦後民主主義の原点を忘れない当センタ―が、村井氏のいわゆる「決定不可能なものを決定」するプロセスの中にこのテーマを組み込んでいくことは、決して荒唐無稽でも非現実的なことでもないと思う。

しかし、「定住外国人にとって「地域」とは何か」というテーマは、本来は、地域連携センタ―以上に、筆者も関係している人文学研究科海港都市研究センタ―においてこそ考えるべき問題であろう。このテーマを通じて両センタ―を思想的に「LINK」することができれば望外の幸せであることを付記して拙文を終えたい。